III　マルコポーロの東方

# 11　写 本 た ち[1*)]

1298 年、とまれかくして書は成った。世に出るやすぐに人気を博し、様々な言葉に訳され、前作をはるかに凌いでその後数百年にわたって全世界で、まさに手に取って読み続けられるものとなった。それが、どれほど新鮮でまた衝撃的であったかは、「メリアドゥス」と読み比べてみるとよくわかろう。消え去ろうとしていた騎士の世界のお話であった前作に対して、まだまだ未知であったが当時姿を現しつつあった東と西にまたがる新たな世界の興味尽きない物語だったからである。しかしそれゆえにまた、大きな変容を被ることが避けられなかった。[1)]

ここで少し先回りして整理しておくと、200 余の写本が今に伝わるが、それらテキストは、形式と内容、用いられている言語と含まれている記事とによって、基本的に以下の七つの家族もしくはグループに分類される（括弧内略号)。１）フランク - イタリア語版（F)、２）フランス語グレゴワール版（FG)、３）トスカナ語（方言）版（TA)、４）ヴェネト語（方言）版（VA)、５）ピピヌスのラテン語版（P)、６）ラテン語セラダ版（Z)、もう一つは写本ではなく刊本であるが、７）ラムージョのイタリア語版（R）である。内容の点では二つの系もしくは大グループに分かれ、（１）から（５）すなわち F・FG・TA・VA・P からなる F 系もしくは A グループと、（６）と（７）すなわち Z と R からなる Z 系もしくはグループ B に分かれる。前者 F 系は、内容が基本的に一致するのに対して、後者 Z 系は F 系にない大小・長短様々な記事を大量に持ち、その数は全体の約 3 分の 1 にものぼる。また、Z と R も相互に異なる記事を少なからずもつ。では、これら写本はどのように作られたか、またそれら異なりはどのようにして生じてきたか。

### 14 世紀前半：F･FG･TA･VA･P

二人によって作られた最初のもの、オリジナル（O）は残っていない。それはルスティケッロの特徴的なイタリア語がかったフランス語(フランク - イタリア語)で書かれていたと見られ、それからいくつかの写本が作られた。そして、その一つからまず F が作られた。さらに、それらのどれかから 1307 年、グレゴワールなる人物によって標準的な正統フランス語に書き換えられ（FG)、1309 年ごろトスカナ語で書き写され（TA)、ヴェネト語版（VA）も同じ頃作られたと見られる。1314-20 年ごろには、ボローニァのドメニコ会士ピピヌスによって VA を基にラ

テン語に訳された（P)。そしてそれらが繰り返し転写されて、孫・曾孫写本が作られのみならず、それぞれからまた別の方言や言語に訳され、その過程でありとあらゆる改変を被ったのだった。

まず、単純な誤記・誤訳・誤解が避けられなかった。見知らぬ国々の聞き慣れぬ物事ばかりだったからである。とりわけ地名・人名は、正確に写されるのは期待できなかった。それらが意図せざる誤りだったとすれば、次に、表現と内容の両面で無数ともいえる要約と省略、削除と縮約が行われた。単語と語句、文と段落、はては一つの記事丸ごとから一章全体までのあらゆるレヴェルにわたる。要らない語句や冗長や言い回しを省き文を簡潔に整えて、必要な事実と内容を伝えることこそ写字生の技量と考えられたし、興味のないことや理解できぬことは削除する権利があると感じられていたからである。さらに、言葉と表現の意図的な書き換えが加わった。当時、写字生や訳者にとって、原文どおり忠実かつ正確に写すあるいは訳すという意識は希薄で、より適切で美しくかつ正しい言葉と文章に書き換えることは、むしろ義務であり権利であると思われていたからである。これには、ルスティケッロのフランス語がひどくイタリア語がかった奇妙なもので、そのままでは読みづらかったという事情も関わっていた。こうしてマルコの伝えんとしたことはズレて行き、ルスティケッロの表現は彼らの文の中に飲み込まれて行った。

また他方では、語句や文の書き加えや話の恣意的な展開と膨らまし、新たな記事の加筆や別の材料の挿入が行われた。彼らは、単なる写字生あるいは訳者ではなく、自分たちも作者の一人と自覚していたからである。こうして、マルコとルスティケッロを中核となる‘中の筆者’、彼らに情報を提供した者と書を‘前の筆者’たちとすれば、さらに写字生・訳者・編者からなる‘後の筆者’たちが加わった。彼らの介入と影響がいかに大きかったかは、これからつぶさに見る。

これには、令名高い桂冠詩人ダンテの文学作品と違って、マルコは無名で作者として権威をもたず、ルスティケッロも名は伝わらず、しかも宗教書や記録ではなく正確さを要せず、吃驚するような事柄や珍しい風習を語る通俗的な読み物として受け止められたという事情もあった。今に伝わる二百余の写本に、一つとして同じものはないと言われる。それらテキストがいかにして作られたか、それほど大きな異なりがいかに生じて来たかを、中国の部の最後 Ch.157「ザイトン泉州」の磁器の記事を例にとって、原写本の中にたどってみる。

**磁器**

かの書が初めて西方に伝えた東方の物事は数多い。否、全編そうであったと言っても過言ではない。そうしたものの一つに磁器がある。どこにでもある陶器と

違って、白く輝く硬く引き締まった磁器が新たな東洋の宝石としていかに求められたか、18 世紀始めにマイセンで生産されるに至るまでいかなる努力がなされたか、周知であろう。9~10 世紀唐に始まり、12 世紀宋代には大量に生産されるに至っていたこの新たな器は、東南アジアそして中東やアフリカにも輸出され、この頃 13 世紀末にはヨーロッパにもやって来ていた。その磁器の、特徴から製法までかなりの正確さで西方に初めて伝えたのは、マルコ・ポーロの書であった。ではその記事は、F から FG、TA と VA、そして P へとどのように変わって行ったか。(年代は現写本のもの。太字は、F は他テキストとの、他は F との異なりを示す。)

1）F : フランス国立図書館 Ms. fr. 1116（14 世紀前半）

**Et encore uoç di que** en ceste prouence, en une cite que est apelle Tiungiu se font escuelle de porcellaine **grant e pitet**, les plus belles **que l'en peust deuiser**. Et en une autre part nen s'en font se ne en cest cite. Et d'iluec se portent por mi le monde. Et hi n'i a aseç et grant merchies, si grant que bie en aurest por un uenesian gros .iii. escueles, si belles **que miaus ne le seusent nul deuiser**. (f.71r.a20-29)[2)]

**さらに皆さんに言おう**、この地方のティゥンジュという市では**大小の**ポルスレーヌの碗が造られ、それは**人が述べうる**最も美しいものだ。また、その市以外の他のいかなる所でも造られない。そして、そこから世界中に運ばれる。またいっぱいあってとても安く、一ヴェネツィアグロスで**誰もそれ以上うまく述べることもできないほど**綺麗な碗が三つも得られるほどだ。

冒頭 Et encore uoç di que＜さらに皆さんに言おう＞の、di＜言う＞の主語 ie (je)＜私＞は、マルコに代って語る筆者つまりルスティケッロで、彼が語り手として登場して話を進める口上の一つであり、F はほぼ全編がこの調子で進行する。他版では、FG のほかは見られない。それらの多くは簡略版で、内容を写す分には必要なかったためである。またこうしたいちいち語り手が登場して口上を述べる物語体は、もはや時代遅れで、事実だけを記す描写体のほうが好まれた。「人が述べうる」や「誰もそれ以上･･･」も、意味に関わらぬ大仰な修辞句として他のどの写本でも省かれる。escuelle は＜広縁のない半円形の器＞つまり碗や鉢、porcellaine＜ポルスレーヌ＞は、イタリア語 porco 豚＞porcello 子豚からで、もとは＜豚の陰門＞を指したが、その形状の類似から＜タカラ貝＞をも意味し、やはりその曲線の形状と白いすべすべとした材質感から、磁器を指すのに使われた

ものである。ポーロの造語ではないが、最も早い使用例に属する。その町 Tiungiu については、本編で見る。

２）FA[1]：フランス国立図書館 Ms. fr. 5631（14 世紀後半）

**Et sachies que**, **pres** de ceste cite de **Sarcon**, a une **autre** cite qui a nom Tiungny, la ou l'en fait moult d'escuelles **et** de pourcelainnes, qui sont moult belles. Et en nul autre **port** en n'en fait, fors que en cestuy, et en y a l'en moult bon marchie. (f.63v.a29-35)

**またご存じありたいが、**この**サルコン市の近く**にティウンニィという**別の**市があり、そこではとても綺麗な碗**と**プルスレーヌがたくさん造られる。そこ以外のどこの**港**でも作られず、そこではとても安く手に入る。

Et sachies que＜またご存じありたい＞は、F でも頻出するやはりルスティケッロの語りの口上の一つで、他版では FG にのみに残る。その点では、FG がまだしも F に忠実に訳されたことと、F に最も近いテキストであることを示す。ところが、Sarcon は F *Çartan/Çartem*＜ザイトン＞の、port＜港＞は F *part*＜所＞の誤記であり、また F *provence*＜地方＞はサルコン市の pres＜近く＞と変わり、磁器の町 Tiungiu は実はいまだ確認されないのだが、それを特定するのに混乱を持ち込んでいる。なお、この Tiungny の第 2 音-gny は、F *Tiungiu* の-giu＜州 chou＞の誤写で、手稿本では n と u は判別し難いことと、i の上の点が打たれなかったことから来る。他版でも多く-gui に写される。さらに、F「ポルスレーヌ**の**碗」は「碗**と**ポルスレーヌ」と誤訳されており、これではポルスレーヌ（磁器）が何か、理解されてなかったことになる。最後の、F の「ヴェネツィア銀貨で碗が三つ買える」との具体例は省略されて、「とても安く手に入る」と一般化された。

３）TA[1]：フィレンツェ国立図書館 Ms. II. IV. 88（14 世紀前半）

E in questa provincia ae una citta ch'a nome **Tenugnise**, che ui si fanno le piu belle ischodelle di porciellane **del mondo**. Et non ve se ne fae in altro luogho **del mondo**, et quindi si porta **in d'ongni parte**. Et per uno viniziano se n'aurebbe tre, le piu belle del mondo **e lle piu diuisate**. (f.61r.17-22)

またこの地方に**テヌニーセ**という市があり、そこでは**この世で**最も美しいポルチェッラーナの碗が造られる。**世界の**他のどこでも造られず、そこから**各地に**運ばれる。また、一ヴェネツィアーノでこの世で最も綺麗で**最も多様な**のが三つも得られ

るだろう。

冒頭のルスティケッロの語りの口調が、まず省かれている。以下の VA と P でも同様である。FG のような誤りはないが、F にない del mondo＜世界の＞を加える一方、F「世界中に」が in d'ogni parte＜各地に＞に変えられた。Tenugnise は、Tenugni と次の語 se がくっ付いたもの、lle piu diuisate＜最も多様なの＞は、F *nul deuiser*＜誰も述べることができない＞の誤訳である。

４）VA[3]：パドヴァ市図書館 Ms. C.M.211（1445 年）

Anchora in questa contra è una zita a nome **Linigui**, in la qual se fa schudelle de porzellane **de mar** molto belle. (f.56v.14-16)

さらに、この地域には**リニグイ**という市があり、そこではとても綺麗な**海の**ポルゼッラーナの碗が造られる。

de mar＜海の＞は、porzellane を＜タカラ貝＞と解した写字生か訳者の加筆であろう。F の後半、そこでしか造られないこと、世界中に持ち運ばれること、大量に造られること、安価でたくさん手に入ることは、全て削られた。Linigui は F *Tiungiu* の誤写で、手書きでは l と t はよく似ており、混同されやすいためである（写本では地名・人名も小文字に始まる）。

５）P[9]：フィレンツェ・リッカリディァーナ図書館 Ms. Riccardiano 983+2992（14 世紀前半）

In hac regione est ciuitas Tingui, ubi scutelle pulcherrime fiunt de **terra que dicitur** porcellana. (f.69r.b21-25)

この地域にティングイ市があり、そこではポルケッラーナ**と呼ばれる土**からとても綺麗な碗を造る。

terra que dicitur porcellana＜ポルケッラーナ**と呼ばれる土**＞は、VA の写字生と違って、ドメニコ会の修道士であった訳者ピピヌスが、磁器について何がしか知っていたことを推測させる。しかしこれでは、「ポルケッラーナ」はその器ではなく土のことになってしまう。VA 同様、他は全て省略された。P の底本が VA であったことが、ここからも分かる。

とこのように、ジェノヴァで二人が作ったものは、次々と削られ痩せ細りすっかり姿を変えてしまった。また、語り手ルスティケッロも姿を消した。これでは、磁器とは何かはもちろん、その素晴らしさもたくさんあって安いことも、その文明的な価値も伝わらなかったことであろう。実際、磁器のことがヨーロッパで詳しく知られるのは、18 世紀初めのイエズス会士ダントルコールの書によってであり、ポーロの書に磁器のことが書かれてあるのが広く知られるようになるのは、以下に見るごとく 19 世紀になってからのことであった。

**F の発見**

ここまで、F から FG・TA・VA そして P へと、それぞれの祖本が作られたであろう年代順に見てきた。その都合上 F を最初に見たが、しかしその稿本は早くから知られていたわけではなく、それが発見されたのは実はずっと後、1824 年のことだった。しかも、それまで筆録者の名前もはっきりとは知られなかった。

それまでポーロテキストは、主に P ピピヌス版によって伝えられてきた。ラテン語はヨーロッパの共通語であり、写本も圧倒的に多く、また 15 世紀半ばに興った印刷術にのって刊本としても広く流布したからである。例えば、コロンブスが携えたことで名高い最初の印刷本（1485 年）は上の P[9] と全く同じであり、最も普及したグリナエウス版（1532 年）は、Est etiam in hac regione ciuitas quaedam Figui nomine, quae celebris habetur in patribus illis, ob pulchras scutellas quae in ea fiunt.＜その地方にはまたフィグイという町があり、そこで造られる綺麗な碗のためにその国で名高い＞と、「ポルケッラーナ」の語すらない。しかも町は、Figui つまり前の章のフジュ（福州）と混同されている。もう一つのミュラー版（1671 年）も同様だった。他は、VA は刊行本があったが、往時の旅行記を集めた娯楽本で、権威を持たなかった。TA[1] は、クルスカ・アカデミーから「オッティモ」（最良）のお墨付きをもらっていたが、刊行されたことはなかった。FG は、豪華な挿絵のおかげで存在は伝わっていたが、どれも印刷されたことはなかった。つまり、P から F と、いわば上とは逆の順序で知られていたのである。他に、16 世紀半ばヴェネツィアの書記官ラムージョによって出版された『航海記旅行記』（1559 年、後述）には、ポーロのテキストが収められていたが、イタリア語集成訳であり、また数十に上る古今の旅行記の中の一つで、少し前の新大陸発見の余波に隠れて、あまり注目されることはなかった。

これらに対して、1824 年パリ地理学協会によって単独写本としては始めて刊行された F、現フランス国立図書館蔵の写本 Fr. 1116 は、次の三つの画期的な特徴を備えていた。一つは、いかにも話し言葉そのままの口調で、しかもひどくイタリア語がかった奇妙なフランス語で書かれていた。二つは、それまでに知られ

たどのテキストよりも長く、他とりわけ P にない記事を多く含み、内容的により豊かだった。三つは、最初の「序」（第 1 章）がそっくり残っていて、その冒頭は「帝に王、公に侯、伯、騎士に紳士の殿方･･･」の特有の呼びかけで始まり、最後に「1298 年、ジェノヴァの牢にて、同囚のルスタショー・ド・ピズにより」と、年次と場所と筆者の名前がはっきりと記されてあった。

そして 9 年後の 1833 年、この冒頭の文章がさるフランス語アーサー王騎士物語の「プロローグ」の出だしと酷似していることが、フランスの中世文献学者ポラン・パリスによって指摘された。しかも、『メリアドゥス』と呼ばれるその物語の作者の名は、「ルスティショー・ド・ピズ」とあった。この、冒頭の文章と作者の名前のほぼ完璧な一致に、マルコ・ポーロの書もそのルスティショーによって書き記されたことは間違いないと判定された。なお、二つの書は冒頭部分だけでなく全体にわたって語彙・表現・文体が一致すること、筆者の名はイタリア語では「ルスティケッロ」に当たることが、後にベネデットによって確証された。

こうして F が、1298 年にジェノヴァで作られた最初のものか、でなくとも言語の点でも内容の面でもそれに一番近いであろうことが確実となった。そしてそれと対校させて、FG・TA・VA・P はどれも、それから派生したものであることが確認された。ここでも上に見たとおりである。ところが、それで一件落着とはならなかった、それらだけではなかったのである。

**R の再発見**

19 世紀、帝国主義列強のアジア進出とともに、それまで省みられることのなかったラムージョ版が注目され始める。17 世紀新大陸を征服し終えたヨーロッパは、目を再び旧大陸に向け、18 世紀インドを植民地化し、19 世紀には中国に触手を伸ばした。アヘン戦争（1840-42 年）も間近い 1818 年、ポーロの近代最初の単行本がマースデンによって出版されたのだが、その英訳に彼が選んだテキストは R であった。この方が「決定的に優れているから」と。実際そこには、それまで最も普及していた P にはない記事が大量にあった。出版はすぐに反響をもった。1827 年、TA の刊行を準備していたフィレンツェのバルデッリ-ボーニは、それを第 2 巻として加え、1845 年にはアウグスト・ビュルクのドイツ語訳が出版され、1865 年 FG を刊行したポーチェは注に R を補った。1871 年、F のフランス語があまりにも奇妙なものだったため信頼せず、ポーチェの FG を底本として英訳したユールも、R を本文や付録に補った。事実 R は、内容が豊富なばかりでなく、多くの記事においてより詳細だった。磁器は、次のようにある（太字は F との異なり、斜め太字は後出 Z との異なり）。

6）R：*Navigazioni e Viaggi*（1559 年）

**Il fiume che entra nel porto di Zaitum è molto grande e largo, e corre con grandissima velocità,** ***ed è un ramo che fa il fiume che viene dalla città di Quinsai; e dove si parte dall'alveo maestro vi è*** la città di Tingui, ***della qual no si ha da dir altro se non che*** in qualla si fanno le scodelle ***e piadene*** di porcellane, in questo modo, ***secondo che li fu detto.*** **Raccolgono** ***una certa terra come di una minera*** **e ne fanno monti grandi,** ***e lascianli al vento, alla pioggia e al sole*** **per trenta e quaranta anni, che non li muovono: e in questo spazio di tempo la detta terra si affina,** ***che poi si può fare dette scodelle, alle qual danno di sopra li colori che voglion, e poi le cuocono in la fornace.*** **E sempre quelli che raccolgono detta terra la raccolgono per suoi figliuolo** ***o nepoti.*** Vi è in detta città gran mercato, di sorte che per un grosso veneziano si averà ***otto*** scodelle. (p.248, l.33~p.249,l.9)

ザイトゥム港に注ぐ川はとても大きく広く、流れは急で、*キンサイ市から来る川の一支流をなす。その本流から分かれるところに*ティングィ市*がある。そこについては*、ポルチェッラーナの碗*や小皿*[5]が作られる*ことの他は何も語ることはない。彼に語られたところによると、次のようである。鉱山のような所のある種の*土を集めて大きな山となし、三十年、四十年と*風、雨、日にさらし*、動かさない。その間に土は精錬されて、*かの碗を作ることができるようになり、その上に望む色を付け、それから窯で焼く。*その土を集める者はいつでも、子あるいは孫のために集めるのである。同市ではとても安く、したがって一ヴェネツィアグロッソで碗が*八つ*買えるだろう。

かく、全くと言っていいほど異なる。しかも、語り手ルスティケッロの姿はない。最初の川のことは本論で述べる。磁器については、その町ティングィ市、ポルチェッラーナの碗、安くてたくさん買えること、などは F と共通する。しかしその他の、「鉱山のような所のある種の土」を材料とすること、それを「山となして、三十年四十年と風・雨・日にさらして精錬する」こと、「土を集めるのは子孫のため」であることは、F にも P にもなかった。「上に望む色を付けそれから窯で焼く」とまである。しかし、マルコの当時 13 世紀末に、磁器は早くもそうした段階に達していたかどうか、美しいコバルトブルーの青花が作られ始めるのは、元も末期 14 世紀後半か早くてもその前半とされる。ましてや、「窯で焼く」はいいとしても、「望む色を付ける」彩色磁器が生まれるのは、明の 15 世紀に入ってからではなかったか。それらの問題は本編に回すとして、とまれでは、これをラム

ージョはどこから採ったのか。

Rの主底本はPであったが、後の全てのマルコ・ポーロ研究の出発点となる名高い「序文」の中でラムージョは、その他に「150年も前に書かれた驚くべき古い昔」の写本を用いたこと、それは親友の「ギジ家」の貴人から借りたものであること、を打ち明けていた。とあれば、そこから採られたであろうことは確実視される。かくて、その発見が急務となった。前述バルデッリ‐ボーニはその書の中で、トレドの司教座聖堂古文書庫にスペインのセラダ枢機卿から遺贈された、ピピヌス版とは異なるラテン語の一写本のあることを記していた。で、それのことではないかと疑われたが、確認されぬままになった。そして20世紀、それの発見によって、マルコ・ポーロはまた新たな展開を遂げることになる。

**Zの発見**

1920年代、ヨーロッパ各国の図書館に眠る全てのポーロ写本を調査していたフィレンツェの中世ロマンス語学者ベネデットは、ミラーノ・アンブロジァーナ図書館に見慣れぬテキストをもつ一ラテン語稿本を発見した。それは、1795年パドヴァでトアルドによって作成されたさる写本のコピーで、冒頭に「セラダ枢機卿の紙写本から書き写された」ものであることが認められてあった。そして驚くべきことにそのテキストは、前半は大きく略されていたが、上のFになくRのみに見える記事の大部分を持つばかりか、FはもちろんRにもない記事も大量にあった。しかも共通する部分は、Fと構成を同じくし、とりわけ後半はそれの忠実なラテン語訳であるだけでなく、ほぼ全ての箇所でより詳細・正確であった。そこでベネデットは、それこそがラムージョが使ったというギジ家稿本（Z[1]）と兄弟関係にあるテキストに違いないと結論した。

そして1932年、Z写本そのものがパーシヴァル・デヴィットによってかのトレドの司教座聖堂古文書庫に見付かり、1938年ムールによって印刷出版された。磁器は、次のごとくである。（太字はFとの異なり、斜字はRとの異なり。）

7）Z：トレド司教座聖堂古文書庫 Ms. 49. 20. Zelada（15世紀後半、1470年頃）

Et etiam in hac **patria** *prouincia* quedam ciuitatis nomine Tinçu, ubi fiunt parasides de porcelanis **in magna quantitate,** pulcriores que **possint inueniri.** Et in illa[7] ciuitate fiunt preterquam in ista, et ab ista ciuitate feruntur per mundum **in multas partes.** Et sunt ibi multe et pro bono foro, ita quod pro uo grosso veneto haberentur tres parasides ualde pulcre. ***Et parascides iste de huiusmodi terra fiunt: videlicet quod illi de ciuitate*** **coligunt** ***limum et*** **terram**

*putridam,* et faciunt magnos montes et sic eos dimitunt per .xxx. et .xl. annos quod ipsos montes non mouent. Et tunc terra in illis montibus tam longo tempore ita conficitur *quod parascides, facte ex ipsa, colorem habent accuri, et sunt ualde relucentes et pulcerime ultra modum. Et debetis scire quod* cum homo terram illam congregat pro filijs eius congregat; *videlicet quod propter longum tempus quo debet quiescere ad confectionem ipsius, non sperat consequi inde lucrum nec ponere ipsam in opus, set filius qui post ipsum est uicturus fructum consequitur ex ipsa, etcetera.* (f.52r.18~52v.9)

またこの国と[7]地方にティンズという市［があり］、ポルスレーヌの器が大量に作られ、それは見出しえる最も美しいものである。そこ以外のどこでも作らない。そしてその市から世界の多くの地に持ち運ばれる。ここにはたくさんあり、しかも安く、一ヴェネトグロッソで綺麗な器が三つ得られるだろう。*その器は次のような土から作る。すなわち、この市の人たちは泥や腐食した*土を集めて大きな山となし、三十年、四十年と*そのままにして*、山を動かさない。するとその山の土はその長い間に精錬されて、*それから作られた器は青色を帯び、とても輝いて殊のほか美しい。また知ってもらいたいが*、人がその土を集める時、それは自分の子供たちのために集めているのである。*つまり、精錬のために寝かせておかなければならない長い期間ゆえ、それで金を儲けることも仕事に使うことも期待できず、それから利益を手にするのはその後に生きる息子の方だからである、云々*。

かく、F とも R ともさらに異なる。前半、一グロッソで器が三つ得られることまでは、F にもあった。いくつかの小さな異なり、F「大小の」／Z「大量に」、F「述べうる」／Z「見出しうる」等の他は、FG・TA・VA・P のどれよりも F とよく一致し、その忠実な訳である。が、ルスティケッロの語りの口上、F 冒頭の「さらに皆さんに言おう」は省かれ、長い修辞句「誰もそれ以上･･･」は、おそらく不要としてやはり没にされて、事実だけを伝える簡潔なものとなっている。一方後半、「その器は次のような土から作る」以下最後の「云々」までは、F にはない。R とは、一致する箇所と異なる箇所とがある。「土を集めて山となし、30 年 40 年と動かさない」こと、「土を集めるのは子供たちのため」であること、は共通する。が、R「鉱山のような所のある種の土」に対して「*泥や腐食した土*」とあり、とりわけ「*それから作られた器は青色を帯び、とても輝いて殊のほか美しい*」は、R にもない。それこそが、磁器の特徴を述べる核心となるべき文であろう。最後の「つまり精錬のために･･･」以下も R になく、しかも「云々」と終わっている。他

方、R にあった「雨･風･日にさらし」と「その上に望む色を付けそれから窯で焼く」の問題の文は、Z にない。これはどうしてか、もともとなかったのか、それとも最後の「云々」の中に略されたのか。

ここでは、発見の順序ゆえ R を先 Z を後に見たが、作成の順序は逆で、現 Z 写本そのものは 15 世紀後半、おそらく 1470 年頃、に作られたものであることが一致して認められる。が、最初にラテン語訳されたのは、共通部分の忠実さと正確さからして、オリジナルにきわめて近い F 系の一写本からと見られ、おそらく 14 世紀始めに遡ると考えられる。一方 R は、上述のごとく P を主底本とする 16 世紀中ごろのイタリア語集成訳（出版 1559 年）で、そこには前述 Z の兄弟写本ギジ稿本（$Z^1$）の他に、V（ヴェネト語、15 世紀）、L（ラテン語要約、15 世紀始め）、VB（ヴェネト語、1446 年）の三つが用いられていることがベネデットによって確認された。それらの中では、$Z^1$ に次いで VB が比較的多く用いられている。そこで、念のためそれを見てみる（太字は F との異なり）。

８）VB：ヴェネツィア・コッレル博物館 Ms. Donà delle Rose 224

Tingiu è una citade ne la provincia **de reame dito**, nela qual se fano **i llavori** de porcellane, çoe schudelle, **piadene et altri ordegni** molto belli; ne **quaxi** in altre parte non lo se ne façi, ma sollo in questa citade. Et **ogra mostrero**, pero che de quelle per tutto el mondo le sono portate, **e per tuto mollto aprexiade**. Avegna che in questa citade el ne si a bon merchato, a sse ne per **tanta moneta chome** .i. grosso venecian .iii. schudelle molto belle. (f.262r.1-6)

ティンジュは**上述王国の**地方の一都市で、そこではポルチェッラーナの**製品**、つまり碗**や小皿や他の**とても美しい**器**が造られる。他の**ほとんど**どの町でも造られず、この町だけである。そして**今**、そこから世界中に運ばれ、**またとても珍重されていることを示そう**。この町ではとても安く手に入るから、一ヴェネツィアグロッソ**ほどのお金**でとても綺麗な碗が三つ得られる。

と、前半だけで Z の後半はない。V・L も同様である。つまり、基本的には F と共通する。となると、Z と上のような相互の異なりはあるが、R の後半はギジ稿本 $Z^1$ から採られたことは確実となる。そのこととは別に、VB 写本は 1446 年作の後代のものであるが、そのテキストは F や FG に劣らず、TA・VA・P よりも良好で、おそらく $Z^1$ と同じ系統の祖本からヴェネト語に訳されたと推定される。とりわけ町の名 Tingiu は、F 他と比べても最もあり得る形かもしれない。また、「碗**や小皿や他の器**」とあり、R のみにあった「小皿」はここから採られたもの

であることが分かる。

**省略か加筆か**

とこうして、マルコ・ポーロテキストにはF系（FG・TA・VA・P）とZ・R系（VB・V・L）の二つの系統があり、その間で内容が大きく異なることが分かってきた。言語の面ではしかし、ルスティケッロの文体とよく一致することからして、Fが一番オリジナルに近いであろうことは誰の目にも明らかであった。また前者F系は、内容が基本的一致し大きな異なりのないことからして、Fの祖本から訳されたものであり、それが要約されたり省略されたりしてFG・TA・VAそしてPへと漸次減少していったことは、前に見たとおり明白だった。それに対して、後者Z・RはF系とは多くの箇所で異なり、しかもそれらにはない独自の記事が大量にあった。つまり、増えていた。磁器の記事でも、前半はFにもあったが後半はなかった。ではこれは、Z・Rに書き加えられたのか、それとも最初に作られたもの（O）にはあったがFで省略されたのか。Fがオリジナルでないにしてもそれに近い原本なら、加えられたのであり、そうでないなら最初からあった可能性が生じる。

19世紀、FとRを再発見した研究者たちは、F写本そのものを原本かそれに極めて近い忠実なコピーとみなして、Rの異なり、つまりRのみにあってFにない多くの文や記事を、ジェノヴァからの解放後ヴェネツィアでそこに残っていた資料を使ってマルコ自身によって、あるいはさらに後他の誰かによって書き加えられた、と考えた。つまり、Rでの加筆である（Zはまだ知られていなかった）。

これに対して、20世紀$Z^1$（Zのコピー）を発見したベネデットは、それと対校してみると、現Fは多くの誤りや欠落、要約や省略の痕を留めていることからして後次の崩れた稿本で、その祖本（$F^0$）はそれより優れたものであったはずであり、実際ZはF系稿本の訳でありながら全般にわたって現Fより正確･詳細であることからして、その祖本か極めてそれに近いコピーからラテン語訳されたものに違いなく、とすれば、オリジナルにはZ・Rの独自記事も含めて全てが揃っていたのが、後の転記や訳の過程で漸次削られ抜け落ちて、それぞれ今あるような姿になった、との新たな説を立てた。とすると、Zの多くの独自記事はオリジナルに近い祖本から省略せずに訳されて残ったもの、RのそれはZの兄弟写本$Z^1$（ギジ稿本）から採ったもの、そしてFにそれが欠くのは、祖本から写す時に省略されたか、さらにその後の段階で次々と省かれて行ったためである、ということになる。つまり、Z・Rでの加筆ではなくFでの要約・省略である。とすると、磁器の記事の後半は、Z・Rに加筆されたのではなく、オリジナルにはあったが後にFで削られたことになる。では、どちらか。それとも、別の形が考えられ

るのか。

Fと Z･R の異なりは、記事にして大小約 200、量にしてほぼ 3 分の 1 に上る。その違いは、語句から文、段落から記事、はては時に一章丸ごとに及ぶ。そしてそれが、全ての文、全ての記事、全ての章、つまり全編に渡る。しかも、上記三版のみならず全ての写本に関わる。上の磁器は、ほんのその一例に過ぎない。実際、語句も文も段落も異なり、またどの写本も違っていた。ではどちらか。オリジナルにはそれらが全てあったが、F 系で省略されていったことは、可能性としては十分ある。また一方、オリジナルは F のようであったが、それに Z（R）で加筆された可能性も十分高い。しかし、これほど大量にある異なりが全てどちらか一方ということはあり得ず、省略されたものも加筆されたものもあるはずである。ただそれを証明するのが難しい。となれば、内容と形式、事実と表現、それに文中での前後関係や情報の経緯から､個々の場合に判断するほかないであろう。

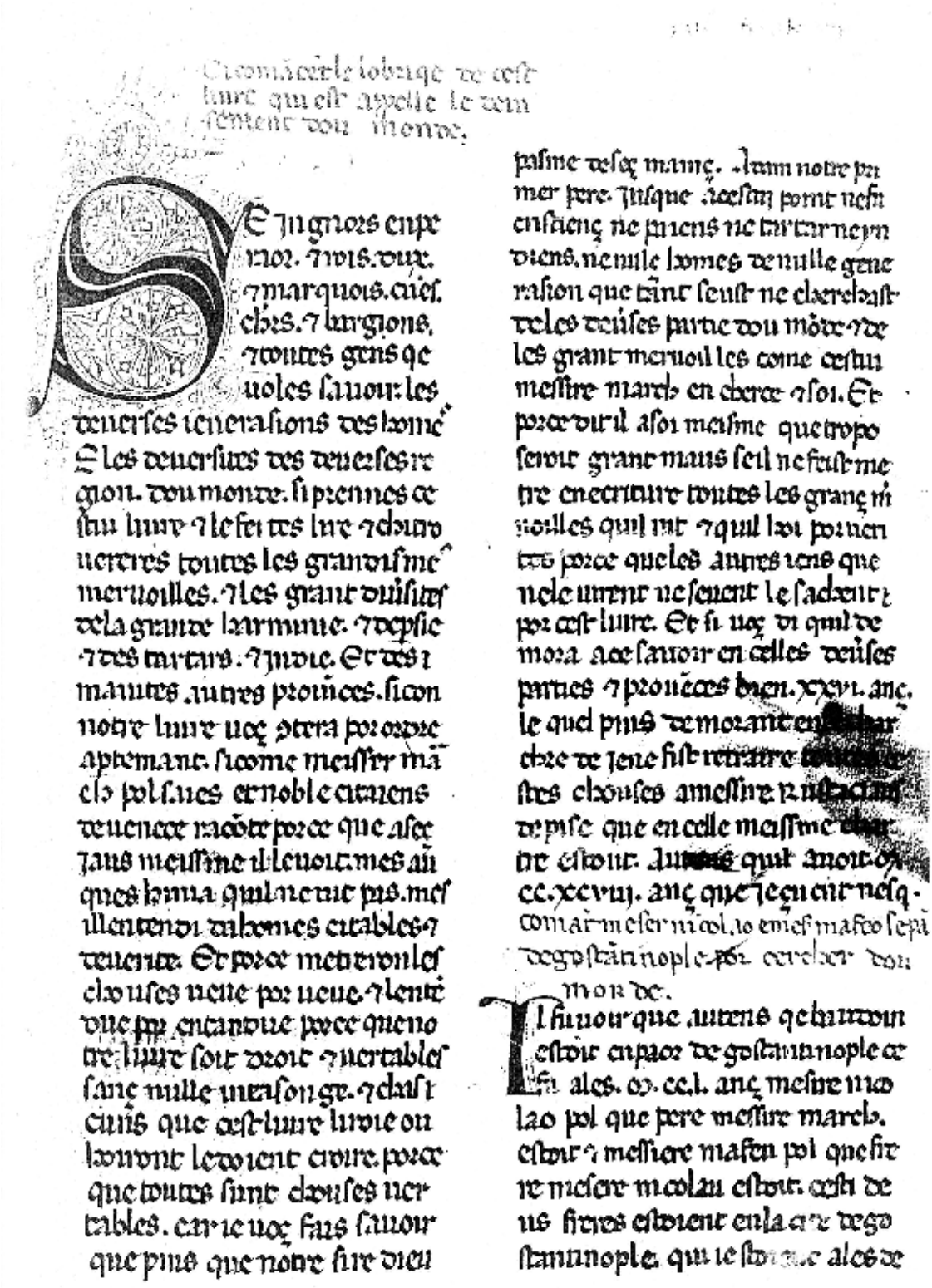
と同時に、最初からオリジナルとされるほど確固としたものがあったのかどうか、果たして一つ時 1298 年に、一つ所ジェノヴァで、一人マルコから提供された材料を基に、一人ルスティケッロによって、書かれたのかどうか、また彼は最初から順を追って書いて行ったか、他にも書かれて使われなかった原稿が残っていなかったか、さらには 1299 年の解放後、ヴェネツィアで、そこに残っていた材料を基に、他の誰かによって、書かれたものもあったのではないか、疑ってみなければならない。以上を念頭に以下まず、何処（どの稿本）に、何（一体何のこと）が、如何に（異なって)、かつ誰（情報提供者かマルコかルスティケッロかそれとも後の写字生や編訳者か）によって、書かれたかを、でき得るかぎり多くのテキストに当って、全ての章のほぼ全ての記事において見てゆく。

1*) 初出：高田英樹『マルコ・ポーロとルスティケッロ―物語「世界の記」を読む』近代文藝社 2016。本誌「III マルコポーロの東方 9 ザイトン泉州」と共通する部分があるが、異なる部分もあり、そのまま再録する。

1）この稿は主に、高田 10「マルコ・ポーロの東方」(1)に基づく。

2）f. 71r.a20-29 は、第 71 葉表(r)左欄(a)第 20-29 行を示す（v は裏、b は右欄)。転記は原写本のままに写す。

Fig. 1　F : Ms. fr. 1116, f. 1r（最初のページ）



Ci commence le lobrage de cest
liure qui est appelle le tem
plement dou monde.

SEIngniors empe
reor. ⁊ rois. duc.
⁊ marquois. cues.
chres. ⁊ lanzgions.
⁊ toutes gens qui
uoles sauoir les
diuerses iteracions des homes
⁊ les diuersitez des diuerses re
gion. dou monde. si prennes ce
stu liure ⁊ le feites lire ⁊ deuis
uerres toutes les grandisme
merueilles. ⁊ les grant duisitez
de la grande larmenie. ⁊ de persie
⁊ des tartars. ⁊ indie. Et des i
manites. autres prouinces. si con
noire liure uoz pora por ordre
apremant. sicome messire ma
cho pol sues ert noble citeiens
de uenece racoite porce que a sez
iaus messire il le uoit mes aui
ques lenua qui ne uit pas. mes
illenteudi ta homes citables ⁊
de uenice. Et porce metreiron les
chouses uerte por uerte. ⁊ lentie
diue pu entandue porce que no
tre liure soit droit ⁊ uertables
sanz nulle uerisonge. ⁊ dist
ciuis que cest liure lirie ou
lorront le oient escrire. porce
que toutes sunt chouses uer
tables. car ie uoz fais sauoir
que puis que nostre sire dieu
pasme desez manz. Jusque a cest pomt ne fi
ensaienz ne prens ne tartar ne ym
diens. ne nulle homes de nulle gene
rasion que tant seust ne chercha st
de les diuises partie dou monde ⁊ de
les grant merueilles come cestui
messire marcho en cherce ⁊ soi. Et
porce dit il a soi meisme que trop
seroit grant mais seil ne fust me
tre en escriture toutes les granz m
ueilles quil int ⁊ quil loi porien
tes porce que les autres iens que
ne le uirent ne seuent le sachent
por cest liure. Et si uoz di quil de
mora ace sauoir en celles diuises
parties ⁊ prouinces bien. xxvi. anz.
le quel puis demorant en [illegible]
chre de iene fist retraire [illegible]
stes chouses a messire [illegible]
de pise que en celle messime [illegible]
tre estoit. Autres quil amoit. [illegible]
cc. xxcviij. anz que ieçu ert nesq-
comar messer nicol. ⁊ ermes mafeo sepi
de gostantinople. por cercher dou
monde.

Il fu uoir que autres qe tantdiu
estoit en pace de gostantinople ce
fu ales. cc. ccl. anz messire mar
lao pol que pere messire marcho
estoit ⁊ messiere mafeu pol que fi
re messere nicolau estoit. cesti de
us fieres estoient en la cite de gos
stantinople. qui se [illegible] ales de

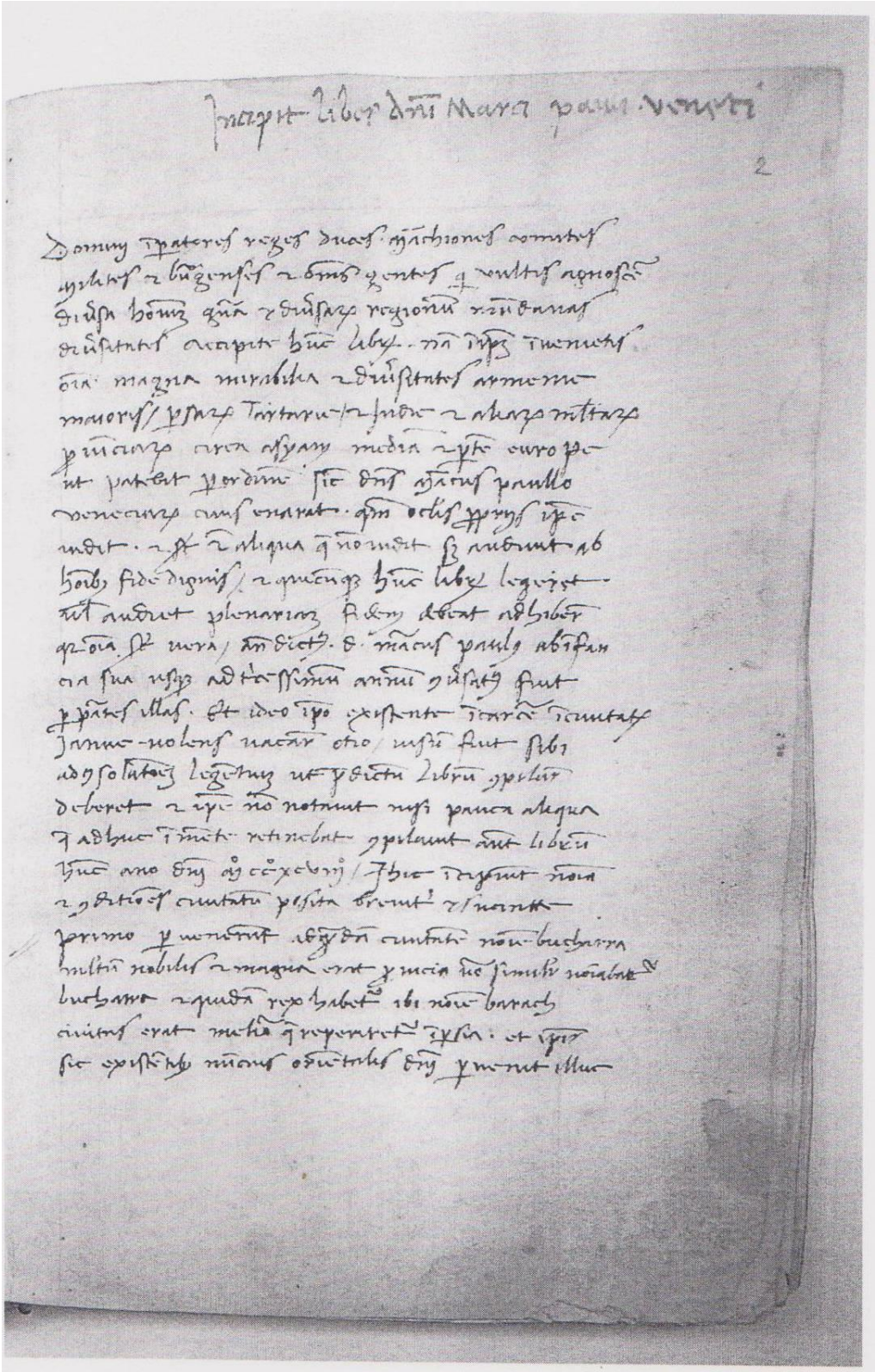



Fig. 2　Z：Ms. 49.20.Zelada, f. 2r (最初のページ)